

第3回ひがしおおさか地方創生ラウンドテーブル

日時:令和5年11月18日(土)

場所:市本庁舎 22階会議室

参加者:市民委員14名、構想日本・コーディネーター及びナビゲーター、市・事務局

A班 コーディネーター:構想日本 構想日本総括ディレクター 伊藤 伸
ナビゲーター:NPO 法人ブリッジフォースマイル 代表 林 恵子

B班 コーディネーター:プロジェクトマネージャー 柏崎 亮太
ナビゲーター:構想日本 特別研究員 定野 司

開会

<省略>

グループワーク

A班

<改善提案シートの確認> ※別紙資料参照。

コーディネーター:

委員の1人から、実際に乗ってみて初めて気づいたことも多かったという経験から、車いす体験の場を作ってはどうかと提案を頂いた。今回は実現できなかったが、提案書にも要素は盛り込んでいきたい。

事務局:

<資料説明:子どもファーストとは>

給付や補助だけでなく、「子どもの有無に関わらず、社会として子どもを中心に考えていくまち」をめざす。教育や福祉の分野だけではなく、すべての部局が子どもへの視点を持って臨んでいく。子育て世帯にやさしい施策はもちろん、全世帯にやさしいまちをめざし、「子どもファースト」の考え方を今後計画に盛り込んでいく。

コーディネーター:

まだ確定ではないが、現時点で市が考える子どもファーストの説明をもらった。

子どもの権利を最優先し、給付ありきではなく、あらゆる施策において子どもファーストを意識することで、子ども・子育て世帯を社会全体で応援できるまちをめざすということは、参加者の属性を絞らない自分ごと化会議と考え方が通ずるところがある。子どもファーストのひとつの実践例がこの会議。理解の度合いはどうか？

委員:

いまいち理解できなかった。子育て中かどうかに関わらず、ということは、子どもファーストは市民全員が対象になるのか？ 市民全員で子どもファーストを考えようということか？

事務局:

押し付けではなく、「社会全体で子どもを応援する」という機運を醸成することが市役所の役割。

委員:

子どもを一番に考えるのであれば、子どもの声を聞ける場所を作るべき。本当に子どもたちが何をしてほしいのか聞くことが大事。

コーディネーター:

現時点でそういう仕組みはあるか?

事務局:

生徒会が子ども議会を年1回やっており、市へ提案をすることができる。生徒会ということで代表の子しか参加しないという課題はあり、一般的に広く子どもの意見を聞く場は現状ない。

委員:

自分の子どもも生徒会をやっていたが、実際やってみたらあまり皆の意見を聞けないと言っていた。

コーディネーター:

各生徒の声を聞く場があればよい。

委員:

子どもと一口に言っても、元気な子も障害のある子もいる。ベビーカーや車いすを利用していると、エレベーターの少なさに困ったり、人に邪険にされる体験をした。そういう人たちを見守る体制があれば。また、子どもの意見を聞く場があっても、人の目を気にして正直に言えないことが多いのではないか。匿名で、今であればアプリなど活用して実施できればよい。

コーディネーター:

特に今の子ども世代は、電話よりスマホ(文字)の方が気持ちを出しやすい。いじめ相談を電話・対面からLINEにしたら200倍ほどの件数になった事例もある。デジタル庁ではいかにそういう仕組みを作るか検討中だが、中々難しいのが現状。

<ナビゲーター講演>

「親を頼れない子どもたちと巣立ち支援」

- ・NPO法人「ブリッジフォースマイル」の活動紹介
- ・虐待等で親を頼れない子どもたちがいる。児童養護施設に入所していても、18歳を迎え「子ども」でなくなった際に支援から切り離されてしまい頼る先やコミュニティがない。また、保護されるべき子どもたちが必要な措置・支援に繋がっていない実態もある。
- ・こうした課題の解決に向けて、当事者活動の支援やキャリア支援を行っている。

ナビゲーター:

こういう会は初めて。市役所と市民が繋がっていく場がこれからもっと必要になってくると思う。皆さんがあまり日常的に関わることのない、マイノリティの子たちのことを知ってもらえたらよいと思っている。子どもたちの問題を社会に知ってもらい、「何かしたい」と思うボランティアや企業と繋いでいきたい。

先程子どもの声をどう聞いていくのか、という話題が出たが、虐待を受けた子どもたちが実際にどういう状態だったのかはあまり表に出てこない。当事者の声を聞くための仕組みとして、「コエール」というイベントを企画している。

委員：

今回 RT に参加したいと思った理由のひとつが、こうした活動にも通じるもの。

今、世の中で最後のセーフティネットが刑務所や少年院になっている現実がある。刑務所や少年院は、再犯防止のため施設内・出所時のケアが手厚い。だが、犯罪までいかないとセーフティネットにかかれいいのか？という疑問があった。市としてももう少し手前でセーフティネットを作る取組みをしようとしているのであれば見ていきたい。その場合、どれぐらいの網目の大きさのネットを張るつもりか、親を頼れない子どもは市の想定に入っているのかなど考えている。

コーディネーター：

ナビゲーターの活動対象にあたる「子ども」とは？

ナビゲーター：

活動の対象としては、ある程度範囲を限定しないといけない。活動開始当初は中～高校生を支援しようと思っていたが、18 歳ですぐ自立はできないので、25 歳ぐらいまでを支援している。措置延長ができるようになり支援対象年齢の上限がなくなるという話が出ており、何歳まで「子ども」の支援をするのかというところは業界内でもホットトピック。

コーディネーター：

市はどうか？

事務局：

基本的には 0～18 歳を「子ども」としている。ただ、現在は「大学卒業まで」というくくりや、親子関係で「親に対して子ども」という見方をすることもある(引きこもりなど)。「未来への投資」という部分では主に 18 歳までかと思うが、シーンに合わせて必要な施策を行っていく。

コーディネーター：

年齢による区切りだけでなく、分野による区切りも存在するのではないか。教育などの分かりやすい分野だけでなく、福祉や生活といったところではどうか？

事務局：

どの分野でも子どもに対する施策を行っていかなければいけないと思う。現状、制度を利用するのに A 制度は A の窓口、B 制度は B の窓口……という建付けになっているが、こうしたところを超えていけないといけない社会になってきていると思う。まだ足りない部分もあり、反省。

委員：

色んな支援はあるが、その存在をどこで知るのか？ 自分も、支援がどこで受けられるのかわからずしんどいなか自分で調べないといけなかった体験がある。例えば「虐待されていたらここへ相談してね」と書かれていても、自分がそこに当てはまるのかわからなかったり、その情報にすらアクセスできていなかったりする。行政は色々やってくれているが、繋がりが分かりにくい。簡単なシステムがあればよい。また、行政に至る前に相談できる制度が分かりやすくアピールできればよい。

コーディネーター：

行政としては施策を用意しているが、伝わっていない現状がある。どう繋がっていけばよいか？

ナビゲーター：

難しいところ。自分たちも相談窓口をもっと拡張したいと思ったこともあるが、現在 HP は子ども向けになっていない＝子ども本人が来る窓口ではない。相談を受けたら問題解決してあげたいが、家がない、いじめられている、など実際の相談を受けたとき、責任を持って解決できる制度に繋げる能力がないため、受けきれない相談もある。無責任には相談を受けられない。相談窓口をたらい回しにされ、行政に不信感を持つ人もいる。相談を受け付けた人が責任を持って解決します！と言えないと、窓口は意味がない。例えば、フランスの児童福祉の仕組みは、相談があれば受付者を中心にソーシャルワーカーが集まり解決まで見守るようになっている。そこまで徹底しないと問題解決には繋がらない。

コーディネーター：

難しい問題。他市の会議で、「産後うつで実家に相談したら親に『甘い』と言われ辛い思いをした。6 か月健診で関わった保健師さんから『あなたが頑張らなくていいんだよ』と声をかけてもらって救われた」という体験を聞いた。仕組みだけでなく、気持ちのある人とどう繋がるか。

委員：

声にならない声をどう聞くか。本人が喋る言葉を鵜呑みにせず、本音を察知する力が解決に繋がる。

コーディネーター：

どう聞いてあげればよいと思うか？

委員：

相談に乗る人の人生経験によるところもあり難しい問題。

コーディネーター：

意思表示が難しい人からの聞き取り時に気を付けていることはあるか？

委員：

目を見て話を聞くようにしている。本心を喋っているかどうか分かりやすい。

委員：

ナビゲーターの話はあまり詳しく知らなかった分野だった。細かいところまでケアされていると思いつつ、相談を受け付ける範囲が難しいと感じた。

コーディネーター：

被虐待児はマイノリティであるが、世間に広く認知してもらった方がいいのか、業界の人が解決する方がよいのか？

ナビゲーター：

皆が認知したほうがよい。相談件数が増えているということは、関心が高まっているということ。通告の他にもやれることがある。1 人である子や理不尽な叱責を受けている子に声をかけてあげるとか。そうした行動をできる人が社会に増えていけば、虐待の抑止にも繋がる。

委員：

この会議を子どもに聞いてもらおうとよいと思った。

コーディネーター：

同世代の子どもどうして子どもファーストについて考えてもよいかもしれない。

委員：

過去苦しんだ子どもであった人が成長しケアする側に回ろうという姿勢は印象的だった。こうした人が子どもたちに向けて活動してくれることで、子どもたちも悩みを打ち明けやすいのではないか。普通の大人ではなく実際に辛い体験をした人であれば支援の間口になりやすい。

ナビゲーター：

当事者活動は価値あることだが難しいところもある。当事者の思いを上手に伝えないと誤解や二次被害を生むことがある。ただ、それを超えて発信したとき、受け取った人たちは声を上げやすい。

コーディネーター：

ケア側に回りたいという思いを持つ当事者たちをどうサポートするか？ 行政にできることはあるか？

ナビゲーター：

発信を中々見てもらえないことが課題。予算化して、学校で講演する機会などをくれればありがたい。

委員：

東大阪市で同じような活動をしている団体はあるのか？

事務局：

個別には分からないが、行政に協力してくれる団体もあることを考えると、複数団体あると思われる。

委員：

そういうところが見えない。支援窓口も、「この電話にいきなりかけていいのか？」と迷うこともある。

コーディネーター：

どうやったら身近に感じられるのか。どのテーマで会議をしても、「行政は窓口を用意しているが市民は知らない」というギャップの話題が絶対に出てくる。

委員：

法務少年支援センター(いわゆる少年鑑別所)も子どもに関する相談を受け付けていることを知ってほしい。何か問題があって繋がる方も多いが、親子関係、職場や学校などでのトラブル、交友関係といった相談もでき、臨床心理士がたくさんいて心理検査も可能。国(法務省)の機関で安心して利用できる。電話やメールで相談でき、親や子どもからの相談はもちろん、成人した子どもを持つ親でも相談可。法務少年支援センターはケースをたくさん積みたい段階なので、迷うこともあると思うが、まずは相談してみしてほしい。そこから適切な支援先(福祉、病院等…)に繋げていく。

コーディネーター：

支援者間で相談内容が共有されづらいという課題があり、国も認識している。データの連携をなんとかやりたい。誰でも見られてはもちろんいけないが、必要な相談機関どうしは繋がれるようにしたい。色々な窓口が取ってきたデータを統合し、整理できれば。まだまだ情報の共有がストップしていることは多い。AIの力など、もっと活用していきたい。

<後半>

コーディネーター:

子どもの視点でまちの課題を考える。「子ども」は広く捉えて。

委員:

自転車走行レーンをもっと市内に増やせないか。

委員:

車と分離する仕組みが欲しい。

コーディネーター:

いきなり2人からこの話題が出たということは道が危ないということか。

委員:

大人も自転車レーンの使い方を分かっていない。自転車が自転車レーンを普通に逆走してくる。細い道はごみや雑草で汚い。手入れされていない街路樹は子どもの視界を遮る。夏休みなど、子どもが活動する時期に合わせて手入れしてはどうか。

コーディネーター:

手入れの頻度は?

事務局:

基本的には予算内で定期的に入入れをしつつ、市民の声に応じて草刈り等行うことも。追いついていない部分もあろうかと思われる。インフラ系は、つくる費用はもらえてもメンテナンスの費用を国からもらえないことも多い。

コーディネーター:

今後、気付いたときは役所に連絡してもよい。

委員:

道路が水平でないため、車いすではまっすぐ進めない。路上駐車も多い。視界を遮るので、自転車、車がいる中でベビーカーや車いすはかなり動きを制限される。

また、傘の持ち方の悪い人が多い。子どもと車いすはほぼ目線が同じ。歩きたばこや傘は目線に近く危ない。

委員:

草木で見えなくて、子どもが突然出てきた自転車にびっくりして転ぶことがある。自転車はスピードが早いし左右もぐちゃぐちゃに走行している。イヤホンをしている人もいる。

委員:

自分がマナー違反をしていて、子どもにマナーを教えられない大人もいる。免許を持っている人だけでも交通ルール講習をもっと厳格にしてほしい。

委員:

横断歩道で手を上げれば車は止まってくれると子どもは思っている。しかし、実際には止まってくれる車ばかりではない。歩車分離式信号を増やしてはどうか? 子どもを交通事故から守るひとつの方法。

委員：

花園ラグビー場等、公共施設の階段の段が高い。もう少し子どもや高齢者、足の悪い人に配慮できないか？

コーディネーター：

ハード面の課題が多く出た。交通関係が多い。

事務局：

東大阪市は自転車が多く、交通マナーをいかに遵守してもらうかが課題。住宅が密集しており道路が狭いためこうした課題を抱えやすいまちではある。他市で育った人からは特に目立つよう。市も啓発をしないとイケないが、個人の意識が変わっていかないとイケない部分もある。

また、東大阪市は戦後に大阪市から一気に拡張したまちであり、さまざまな規制ができる前に住宅や工場が建ってしまったので、道が狭くなってしまっている。今からの拡張も難しい。こうした事情もあり、交通量に耐えうる道が少なく危険な道路となってしまう。古いままの施設も多く、配慮しきれていないのはそのせいもあるか。

コーディネーター：

道路が今のままではいけないというのが皆さんの総意と感じた。ただ、道路の状況を変えるためには選択肢は多くない。他の予算を道路に回すのか、マナーを改善するのか。マナー改善は市でできることだけでなく、個人がやっていかなければいけないこともある。

他に意見はないか？

委員：

小学生の妹がいるが、学校のタブレットで YouTube を見ていて毎日親が怒っている。本当は見られないはずなのにブロックを突破しているよう。防げないのか？

事務局：

制限はかけているが、ネットで方法を調べて制限を解除されることもあり、いたちごっこな現状。

委員：

学校教育のために貸し出しているもの。目的外使用はよくない。

委員：

ラグビー場のイスの下にアシナガバチが巣を作っていると聞いた。イベント開催時は問題にならなかったのか？

コーディネーター：

委託事業者が清掃、管理しているはずだが、そのような現状があるのか。

委員：

歩きたばこが多い。喫煙の許されている場所で吸っているのか？ 取締りを厳しくしてほしい。

委員：

情報発信の課題について。J-COM を母が結構好んで見ている。番組内で情報を流してはどうか？

委員：

情報化社会で子どもたちも YouTube を見ている時代。楽しめるコンテンツが増えた分、子どもどうしのリアルな交流が減っているのではと思う。体育祭や文化祭など、学校行事を充実させてはどうか。

コーディネーター：

イベントが減っている感触はあるか？

委員：

イベントはあっても参加しないという人が増えたのではないか。参加を促す取組みを。

委員：

今時だとテレビを見ない人もいるので、Twitter やインスタなど、子どもたちが実際に使っている情報収集ツールを活用してはどうか。市政だよりは月 1 回しか発行がなく、一方で市公式 LINE では通知が来すぎて何が必要な情報が分かりにくい。必要な情報を必要な量取れるように。

コーディネーター：

情報発信についてはどこの自治体も悩んでいる。情報を出して終わりではなく、どれだけ届いているのか把握することが重要。行政の苦手な部分。

また、ゲーム内でのコミュニケーションに終始してしまって、他の楽しみまで行きつかなくなっているという部分があるのかも。子どもの発想力という、改善提案シートで出ていた課題にも繋がるか。

コーディネーター：

子どもを優先すると他の人の便利な生活を侵すことがある(トレードオフ)ということも考えていきたい。

委員：

今は自分が自分がという時代。昔はどうぞどうぞの時代だった。横断歩道も一方通行も、全てがスピードの時代になってしまった。どうぞの精神をどう持つか。個人の取組みだけでは難しいと思うので、学校で教えたり、警察の協力を得たりしてはどうか。机上の空論ではなく、実際に地域にある道を例にするなど、地域密着型の教育をできないか。もう一歩進んだマナーの周知を。公園の清掃などであれば、近隣の大きな企業の CSR などに頼ってもよいのでは。

委員：

トレードオフ、難しい問題。バランス感覚が必要。

コーディネーター：

バランスを取るのが行政の役目のひとつ。

委員：

マナー教育はずっとやっているはず。親しみを持てる内容なのはよいことだが、もう少し厳格な受け止めをしてもらえれば。有名人を活用するなど、もう少し「自分たちでよいまちをつくっていかうね」という圧を(よい意味で)かけてもよいと思う。東大阪市にホームタウンのあるプロスポーツ選手を活用しては？ チーム側のアピールにもなる。

コーディネーター：

路駐や歩きたばこ、雑草の問題などは、「危ないよね」という合意・共感は得られやすい。そのあとの「じゃあどうする？」が課題。実際の体験や具体例が強い実感を持って迫ってくれば、マナーの向上に繋がるのではないかと。ただ「マナーを守ってね」と言うだけでは効果がない。

委員：

元々気を付けていた方だと思うが、実際に車いすになって本当に暮らしにくさを実感した。実感していない人には分かりづらい部分も。また、小学生はまだマナーを守っている。大きくなっていくとマナーを守らなくなる。市にゆかりのあるインフルエンサーなどが促してくれれば効果があるのではないかと。

委員：

小学校でも自転車講習会があったが、中高生になると「ルールを守らない方が格好いい」みたいな感覚がある。そういう子にはインフルエンサーとかが言っても響かないのでは。どうしたらいいのか。

コーディネーター：

上っ面だけでないマナー講習を考案する必要。

委員：

「体験しないと学べない」と親から言われていた。事故に遭わないと分からないとまでは言わないが、もう少し実感を持って学べる方法があれば。

ナビゲーター：

マナーを守らないとどうなるか、大人が理解し発信できるようになれば。怖い経験をした子どもが大人に訴えるなど。危険を疑似体験するくらい切迫感を持って伝えることができればインパクトがあると思う。

コーディネーター：

物事を考える出発点が「子ども」ということが子どもファーストなのかもしれない。大人にどう想像させるか。ただのマナー違反、ということではなく、マナーを守らないことにより危険に晒されている子どもがいるということ学ぶ。

50万人の市民全員が納得することなんてない。政治・行政がバランスになることも大事だが、市民の目線も大事。

B 班

コーディネーター：

今回配布した資料も参考にしながら、子ども真ん中の取組みにどう繋げていけるかを考えていく。

<ナビゲーター講演>

「親も子ども孤立しない・孤立させないつなぐれ！私たち」

コーディネーター：

ナビゲーターの講演について、何か質問等があれば。

委員：

壮大な話だった。どこからどうしたらいいのか。不登校にクローズアップしていいのかということも思った。自分の子どものクラスでも不登校の子が30人中7人で多い。

話にあった、生活困難と非生活困難との区別はどうつけているのか。

ナビゲーター：

年収300万円以下、生活必需品がない、緊急時の為の5万円の貯金がない、公共インフラを止められた経験がある、といった項目で複数該当があった場合を生活困難としている。足立区では20～25%の間になるが、東大阪市でも同程度ではないかと思う。

委員：

色んな調査の結果が出てきてデータが集まっているならば、予測を始めてもいいのではないかと思う。不登校になりやすい事例や相談して気持ちが楽になった数など。利用率でなく満足度で予測していくことができればいいのではないか。

ナビゲーター：

学校に行きたくなくなった人にまずどんなアプローチができるかということが非常に重要だと分かって、足立区ではスクールカウンセラーを多く配置して、別室登校も実施した。データを持っていると施策のエビデンスとなるのが大きい。

コーディネーター：

データを活用することで、不登校はもちろん虐待など色々な可能性の予測ができるようになるというのが今後あり得るのかなと思う。

委員：

子どもも大人も、相談窓口はたくさんあってもいざというときどこに連絡したらいいか分からなくなるのが現状。垣根を超えてネットワークを作っていくことが大事だと勉強になった。歯科検診の結果等のデータが共有されているという話があったが、実際に足立区では運営されているのか？

コーディネーター：

足立区では既に運営している。色んな切り口があるが、歯科は生活習慣や食生活と繋がっており分かりやすいということで、衛生部とコラボで実施した。やるなら徹底的にということで、回収が100%になるまで追跡調査を実施した。

委員：

歯科検診のように、問題を抱えているかもしれない1%に気付くための手がかりとなるデータが教育部門と共有されていたら、もっと色んなことに気付いていけると思った。

ナビゲーター:

子どもが生まれる前から母子健康手帳をもらって行政と繋がっているはずなのだがどこかで途切れてしまっている。それをどれだけ繋いでいけるかというところ。

事務局:

小学校に入学したときに途切れてしまいがち。子どもが元気であればあるほど記録が残らない。

ナビゲーター:

歯については法定の定期健診があるが、足立区では期間の間隙を縫って歯科検診の仕組みをいれているので小学校・中学校に上がっても繋がっている。高校生や社会人になっても続けていければもっとデータが蓄積できるだろう。

事務局:

子どもが小学校に入学したときにデータが入るようにしたということか？

ナビゲーター:

その通り。問題は“漏れている”人をどれだけ引っかけることができるか。例えば、通院データが繋がれば健診にもっと行こうと思う人が増えるかもしれないし、自分が気を付けることに繋がる。足立区にいると健康データを一元管理できますとなれば「健康のまち」とも言えるようになる。

コーディネーター:

データの一元管理は便利だが、市民側として抵抗感はないか。

委員:

個人的にはどんどん使ってくださいという感じ。

委員:

自分は使ってもいい派だが、踏み込んではいけないところで子どもや保護者に対して余計なことを言うてしまうなど、新たな問題の発生リスクもある。重要度が高い個人情報なので漏洩も怖い。

委員:

個人としては問題ない。反対する人の意見としては、特定の人にしか見られないようにしてほしいのではないかと思う。

コーディネーター:

データ管理をきちんと行うまちだから住み続けようという気持ちになるかどうか。引っ越すと連続データが使えなくなることが、引付要素になるかどうか。

ナビゲーター:

最初のテーマから、機関を繋げること、データを繋げることが出てきた。ただ、データについては個人を特定しない使い方もある。傾向で類推したり、施策へのエビデンスとして活用したり、必ずしも個人を特定しないといけないというわけではない。

委員:

現状、東大阪市では子どもの悩み相談で得た情報は学校や家庭に共有されるのか。

事務局:

ジャンルを絞らず受け付けるような“何でも相談窓口”を作ればできるかとは思いますが、今は各窓口での相談なので、受け付けた窓口にしか残っていない。他部署から聞かれた際には共有している。調整が難しいところだが、情報共有の必要性は感じている。

ナビゲーター:

そういった情報共有ができれば支援の漏れがなくなるし、効果があった取組みを広めることもできて、幅が広がっていくので、総合相談窓口やデータの一元化は必要。

事務局:

教育や福祉、障害などそれぞれ相談窓口があるので、“相談アベンジャーズ”のような形で専門家チームを組めたら本当はよいと思う。

ナビゲーター:

繋げる仕組みがあればそこまでテクニカルな問題はないのかなと思う。

足立区では、生活保護家庭に対し、夏休みに福祉事務所から「子ども訪問」をする。また、生活保護受給していても食べていけない家庭に対して毎日ではないがお弁当を届ける事業を実施している。

歯科検診も含めて何かしらの繋がりを作ることが大事で、支援漏れを防ぐのに役立っている。

コーディネーター:

繋がりがある、交流できるというのがよい。相談できる人がいるとよいという話があったが、相談相手は役所だけではない。

委員:

総合窓口について、電話をかける側にとっては便利でいいが、受ける側がオールマイティにならないといけないのは中々難しいのではないかと。人材確保できるのか。電話をかけたときのファーストコンタクトが大事で、そこが悪ければ相談する気もなくなってしまう。総合窓口にすることで人材が足りなくなり、窓口が縮小されてしまうのではないかと不安がある。最初に電話に出た人が対応するというより、専門相談員と繋ぐことができるかどうかの方が大事だと思う。

事務局:

総合窓口を作るとしたら、相談内容を聞いて専門ダイヤルをアナウンスする対応か、専門員より折り返し電話する対応のどちらかになると思う。

委員:

相談する側はあまり電話をかけ直したくないのではないかと。

事務局:

確かに。こちらからかけ直すにしても素早くできるかどうかも課題。

ナビゲーター:

電子音声案内ではなく人間が対応して専門窓口に繋げてほしいと思う。相談スキルの向上にも寄与するので相談データの蓄積が重要。

委員:

日本は豊かだと思う。こういうサポートがあるのはすごいと思う。

プライバシーについて、自分の国ではそこまで気にならないが日本は結構気にするんだと思った。自分の国だとオープンでインクルーシブな感じ。日本人は隠すのが得意だと思う。その違いが感じられた。

柏崎

データを蓄積して活かすことに、自国では特に問題にならないと思うか？

委員：

ならないと思う。家庭の問題などを他の家庭と比べられるのもよい。

ナビゲーター：

今までは個人情報漏らさないことが重要だった。活用すればもっといいことができる、精緻な政策ができるという流れに最近なってきた。政策の選択と集中にはエビデンスと分析が必要になる。

委員：

発達障害がよく取り上げられるようになってきた。発達の相談が増えている。足立区のようにヒアリングシートであらかじめ学校がその子の特性を知って受け入れ体制を整えることはできると思うが、症状も人によってさまざまで、家庭に問題があったり精神的な問題を抱えていたり状況も人それぞれなので、学校や先生も、分かっているけど対応しきれない部分もあるのではないかな。

ナビゲーター：

発達障害については、10年前は6.5%、現在は8.8%という状況で、増えている。足立区では子ども44,000人中2,500人が発達障害と診断されている。このため、特別教室を設けていて、先生にもトレーニングを実施している。発達障害児への対応はさらに重要になってくるし、高校でも対応を取り入れるといった話もある。先生への支援として、ICTを導入して発達障害の傾向がわかるソフトやトレーニングソフトを用意している。

コーディネーター：

個人的な感想になるが、相談したくなる前に支援の芽を届けるという発想は勉強になった。ヒアリングシートを必要な人だけではなく全員に書かせることで本人が気付いていない場合でも状態を把握できるという話もためになった。歯科検診やお弁当の配布等で接点をもつこと、相談できる人がいると色々な数値がよくなること、そういう環境を作ることが大事。

後半は、自分たち・地域・行政と視点を分けて、できることを検討していく。

<後半>

委員：

市の事業等について、認知度・利用度が上がればよい。

個人としては、子供のLINEグループがたくさんあるので、子どもを通じて情報共有を図ってみようと思う。また、子ども食堂にも実際行ったことがないので行ってみようかと思う。

地域としては、地域の祭りを活用してはどうか。市にもいろんな祭りがあって、不登校の子が参加しているケースもあると思う。こうしたデータが学校に連携できればよいのではないかな。

行政にしてほしいことは、子どもと家庭もちろん大事だが、重要な役割を担う先生へのケア。校区を撤廃する、担任の先生を学期毎に替えるなど、新しい取組みをしてもよいのではないか。

コーディネーター：

先生に対するケアは確かに個人や地域というよりは行政の役割。

ナビゲーター：

お祭りだけでなく、フリースペースを作れば、不登校や学校との繋がりが薄い子でも地域の方の接触があったりする。そういう情報は現状学校に伝わっていないので、共有できれば。

先生は大変なので、ICTやスクールカウンセラーを活用していきたい。担任は業務として重いので、学年担任制にするという自治体もある。心理的な負担をどれだけ軽減できるかという要素も重要。

コーディネーター：

子どもを守るためにまず先生を守るという考えも大切。

ナビゲーター：

先生も孤立させてはいけない。

事務局：

子どもとの繋がりをテーマに活動している方は、団体、NPO限らずいる。そういった方に、地域活動支援室では地域まちづくり活動支援助金事業を行い、支援している。

自宅をカフェに改装し、不登校の生徒にそちらに登校してもらうという取組みをしている元教師の方がいて、不登校者の居場所として、学校と子どもの繋がりを作っているケースもある。こうした活動をどう発信していくかというのが課題。

ナビゲーター：

退職された方が参加しているということで、生きがい・やりがいの場にもなっている。

コーディネーター：

子どものLINEで発信してみようという発想など、行政にすべて任せるのではなく自分たちでも草の根で発信していくのはよいと思う。昨今流れてくる情報の信頼度が低下し、知っている人から提供された情報の重要度が上昇しているので、効果が見込まれるのではないか。

委員：

行政からの発信も大事だと思うが、文章が硬くて分かりにくい。

委員：

チラシなどを見たときに、何を言いたいのか分からない。子どもが読んでぱっと分かるものでないといけない。漢字が多いと子どもは読む気を失くす。若い人は活字離れと言われ、SNSが発達していることから、視覚情報、見せ方が大事。文章のみより、画像を入れたりするべき。色々縛りはあると思うが、まずは文書が柔らかくないと伝わらないと思う。

コーディネーター：

子ども向けのPostをしたり、ショート動画とかを作ってみるとするのも面白いかもしれない。伝えることが目的なら検討の余地はある。

委員：

個人としてできることとして、自分が積極的にイベント参加してこなかったのが、自ら参加することで繋がりが入り口になればと思う。今までは、自分が行ってもいいのか、やってもいいのか、という気持ちがあって自主的には参加してこなかったが、資格がなくてもできることがあるとか、気軽にきてくださいということなら行きやすいので、そういったアプローチをもっともらえれば。アプローチを多くしてもらったら入口が広がって入りやすいのかなと思う。

事務局：

広報周知に関しては、行政も市民団体もいかにして情報を届けるかというところに課題を持っている。市民団体の活動を見ていると、SNS発信もしているが効果があるのはやはり口コミという印象。知人からの情報になるので信頼性が高い。

活動に関する場で話をするとか、自治会の掲示板で回覧するとか、地道に情報を届けようとしているが中々難しいと聞いている。市から広報してくれと言われることもあるが、やってもあまり効果がない。求めている人に情報が届いているかどうか不安。

ナビゲーター：

市によって、スキルを持つ人と求める人のマッチングができればよい。通販サイトのおすすめ商品のように、嗜好にあった誘いが自動的に出てきたら面白い。

委員：

イベントにボランティア参加していたときに、ダウン症の子どもが来ていて、代表の人がこういった体験ができるから来てみたら、というような声をかけていて、それも相談窓口への繋がりになってよかった。教師以外にも子どもに関わりたい人がいると思うので、そういう人を拾えたらよい。

相談窓口やデータによる課題の予測に関する話があったが、家庭の問題を自分では認識できていない人もいると思うので、データから予測、相談窓口の案内までできればよい。

ナビゲーター：

家庭の問題を認識できていないという話について、例えばヤングケアラーの問題だと、そうした家庭環境が“普通”でないことを、個別ではなく皆に伝えないといけない。

事務局：

発達障害の話も同じで、気付けるようになったから相談が増えているという背景もある。

ナビゲーター：

発達障害の認知度が上がったことで、声を上げるのに抵抗がなくなってきている。発達障害児への支援は早いほうがよく、例えば忘れものが多いというのも発達障害であることもあり、ふとしたきっかけで障害に気付くことができれば支援が受けられる。

コーディネーター：

気付けていない家庭に「もしかしてお困りですか？」というアナウンスができればよい。

委員：

支援が必要かどうか見えない・見えにくい方への支援が課題。相談窓口の一元化などの話もあったが、予測広告のようなことができるなら是非ともやってもらったらよいと思う。情報発信のところは、私も分かりにくいし、堅苦しいと思う。今の若い世代はインスタを利用している人が多いと聞くので、画像などを多用してはどうか。フォロー、拡散に何かインセンティブをつけてはどうか。

コーディネーター：

どういうインセンティブがあれば拡散したいと思うか？

委員：

対大人は難しいが、子どもなら駄菓子プレゼントなどで参加してくれるのではないか。

コーディネーター：

面白いコンテンツなら何もしなくても拡散されていくが、行政情報では工夫が必要。個人の嗜好から予測してアプローチしたり、情報を分かりやすく発信できればということ。自分たちから情報を発信してみたり、SNSで情報を拡散したり、イベントで声かけをしてみたり、といった意見が出た。

ナビゲーター：

子どもや関係者を中心に、相談事が生まれる前に繋がりができているとよい。関係者が組織・団体と繋がっていれば相談者も社会に繋がりができていく。無理して組織を作る必要はなく、組織に入ってもよいし、個人でも声かけなどできることがある。困っている子ども自身に繋がることは難しいかもしれないが、例えば SNS をフォローするだけでも繋がりになりうる。

委員：

声かけはしたいが、中々しづらい世の中。注意してもこっちが悪者になってしまうことも。子どもが泣いていても声をかけにくい時代になったと思う。

コーディネーター：

道端での声かけは確かに難しいが、イベントならまだしやすい状況かと思う。

事務局：

イベントなら泣いていたら迷子かと思って対応はできるが、夜にスマホを触りながら屋外に座っているといった場合などは判断が難しい。

コーディネーター：

声をかけやすいシチュエーションに持っていくのもよいと思う。イベントやスポーツ教室など地域でできることがあれば。

委員：

市の愛ガードはすごくよい取組み。登校時間と下校時間に横断歩道をボランティアが見ていてくれる。子どもに話もできる。このように、制服やゼッケンなどがあれば話しかけやすくなると思う。

事務局：

愛ガードについては人材不足が課題。高齢者が多い。時間帯の面から仕事がある方には難しいのが現状。

委員：

若い人ももっと参加してほしいと思う。子どもも安心できるし、繋がりにもなる。自分の子どもも、愛ガードで顔なじみになった方の話を家でしてくれる。

コーディネーター：

シニア人材をマッチングするのもよいかもしれない。

委員：

愛ガードはできないが、見守りというか子どもたちを気にかけて見るようにしたい。実際に声をかけられるかは分からないが、明らかに様子がおかしいときは適切な窓口に連絡するようにしたい。

ナビゲーター：

虐待の通報は確信がなくても大丈夫。

委員：

子どもに直接声をかけるのはちょっと難しくても、愛ガードの人に相談してみるのにはありかと思った。SNSについては、東大阪市で統一のハッシュタグがあればよいのではと思った。ハッシュタグを検索したら一覧で投稿が見られるので、そこで新たな発見が生まれる可能性もある。

委員：

本当に支援が必要な人には自覚症状がないという話に関して、発達障害やヤングケアラーといった単語すら10年前は知らなかった。言葉が独り歩きして正しく伝わっておらず、自分で調べる必要もある。当事者が直接言われるのは嫌だと思うので、実際どういうものなのかを周りが知らないといけない。

委員

東大阪市はトラックが多いので相談窓口のトラック広告を出してもよいのではないかな。

また、子どもを含めた外国人の方と日本語の難しさを話し合ったり勉強する機会があればよい。小学校の放課後に家族も含めてスポーツができるような場があればよいとも思う。

事務局：

トラック広告は面白い発想。東大阪市内のみを走るトラックや市営バスなら検討の余地はある。

委員：

子ども好きなので大学時代バイトで塾講師をしていた。派遣会社とコラボした、任意で子どもを集めて教えるバイト企画を体験したことがある。そこに来る子どもたちは、費用面で塾に行けないとか、学力レベルの低い子。授業に困難を感じているなかで、先生でも親でもない大人の方がフラットに話しやすいと思う。そういう場が地域でできると、学習面だけでなく心の面でもサポートできるのではないかな。この取組みのなかで市の取組みや窓口、また学校に情報が届くよう繋げることが重要。誰でも来ることができて資格の有無に関わらず第三者の大人が参入している空間が大事だと思う。そういう場があれば、社会人になって子どもに関わる機会が減ってしまった人でも入りやすいし、子どもに話しかけやすい。

委員：

認知させることと行動させることを分けたほうがよい。

子どもに対しては、iPadを全員持っており直接訴えかけられるので、ICT 技術をもっと活用すべき。外国人が増えており、日本語に課題のある子どもたちは孤立しているように思う。これからも外国人は増えてくるので、対応をしっかりとしてほしい。東京ではやさしい日本語で発信しており、東大阪市は遅れていると感じる。やさしい日本語について広く知ってもらうことが大事。

コーディネーター：

今回は「繋がり」をメインテーマにさまざまな意見を聞くことができた。

今後、今日までに出了意見をまとめて提言書案を構想日本で作成し、次回で最終調整という流れ。

本日の会議のまとめ

A 班

コーディネーター：

前半では、ナビゲーターより親に頼れない子どもたちへの支援の話をしてもらった。

なぜ呼んだかという、「子どもファーストとは何なのか？」ということを考えるヒントとするため。見えづらい子どもたちも支えていくにはどうすればよいのか。また、行政は相談窓口を設け発信もしているが市民側は知らないというギャップがあり、この課題をどう解決するか。

ブリッジフォースマイルのイベント「コエール」の「親ありき日本を超える」というキャッチフレーズは、社会全体で子どもを応援するという子どもファーストの考え方に繋がる部分があると思う。

後半では、子どもの視点でまちの課題を考えた。

道路(狭い、自転車マナー、草、路駐など)の話が多かったことから、市域の特徴として他のまちより危険ポイントが多い可能性がある。車いすを利用したことのある委員がおり、子どもと近い視点から意見を得られた。交通マナーを守れていない大人もおり、親が守れないと子どもに伝わらない。

また、子どもの利益を優先するとき、別の誰かの利益を侵してしまわないか？というトレードオフの問題についても考えた。バランスや譲り合いの精神が大事。

マナー遵守のための周知・啓発に、市にゆかりのあるインフルエンサー、タレント、スポーツ選手を活用してはどうかという案も出た。マナーを守る意識を持つためには、マナーを守らなければどうなるか？ということ、実感を持って想像させることも有効か。子どもの声を活用して、取組みができればよい。

B 班

コーディネーター：

“繋がり”をつくるために自分たちができることは何だろうか？ということ考えた。

ナビゲーターより足立区の取組みを紹介。不登校など既に悩みを抱えてしまっている段階ではいっぱい
いっぴいの状態なので、相談したくなる前に情報を届けるということを学んだ。例えば発達障害の支援
であれば、発達障害児がいる家庭だけ働きかけるのではなく、すべての家庭を対象としたヒアリングシ
ートを活用するなど。

情報発信については、行政に対して「もっとこうしてほしい！」となりがちだが、自分や地域ができるこ
とも考えた。行政に対しては、子ども向けの発信では字だけでなくイラストや写真を活用するよう提案
があった。自ら働きかけるという部分では、子どもの LINE グループを通じて発信したり、イベントに積
極的に参加してみるという声が出た。地域でできることとしては、地域住民が見守りを行ったり、子ども
の居場所を作ることができればという話になった。親でも先生でもない第三者としての関わり。塾まで
はいかなくても学習サポートなど。学校との連携もできればよりよい。

ナビゲーター：

ナビゲーターとして、足立区で取り組んだ不登校支援の話をした。子どもファーストには“こぼれている”
子どもを漏らさないという要素もあると思う。歯科検診など全員が対象となる事業を入口にして、ヒア
リングシートの返ってこない1%を徹底的に追跡し、問題のある子どもに繋がれるよう取組みを行った。
また、情報のネットワーク化が必要という話もした。支援者間での情報共有に加え、他市の先進事例の
共有なども有効か。大事なものは人のネットワーク。自分は何ができるのか？ということを考えること。

コーディネーター：

次回が最終回。今回までの改善提案シートを元に提案書案を作り、次回で完成させる。これを意識し臨
んでもらえればと思う。

事務連絡
閉会

<省略>